

奈良県御所市柏原

拔上罐子塚古墳第2次発掘調査報告

—周堤隣接地の発掘調査—

平成4年3月

奈良女子大学蔵書



931008281001

御所市教育委員会

210.2

93

奈良県御所市柏原

掖上罐子塚古墳第2次発掘調査報告

—周堤隣接地の発掘調査—

平成4年3月

93100828

御所市教育委員会

例　　言

1. 本書は、御所東部農業協同組合組合長理事・古村宗一郎氏の依頼により、御所市教育委員会が実施した、接上罐子塚古墳周堤隣接地の発掘調査報告書である。
2. 現地調査には、試掘調査を御所市教育委員会・藤田和尊があたり、本調査を同会・木許守が担当した。
3. 本調査の調査期間は、平成3年10月21日から同年11月12日まで（実働13日）であり、調査面面積は約90m²である。
4. 現地調査には、西本実春、上口勝秀、角南義則、小山義弘、松尾弘海、森田利昌、西本義雄、平尾今日子、木村美幸の参加、協力を得た。
5. 遺物整理および本書作成には、木許のはか、平尾、藤村藤子、尾上昌子、高田加容子、木村、長越和世があった。
6. 製図は、遺物については藤村が担当し、その他を木許が担当した。
7. 遺物の実測図の縮尺は、木製品を1/4に、その他を1/3に統一した。また、文中の遺物番号は、挿図、観察表、図版中の番号ともすべて統一した。
8. 出土遺物のうち、木製品の樹種鑑定を、天理大学附属天理参考館・金原正明氏に依頼し、玉稿を賜った。
9. 本書の執筆は、第4章以外を木許が執筆し、編集にあたった。
10. 現地調査および本書刊行には、御所東部農業協同組合組合長理事・吉村宗一郎氏をはじめ、関係各位に全面的なご理解・ご協力をいただいた。記して謝意を表します。

本文目次

1章 位置と環境	1
第2章 調査の契機と経過	4
第3章 調査の成果	6
第4章 川土材の樹種	16
第5章 まとめ	17

挿図・表目次

図1 調査地位置図 (S.=1/5,000)	1
図2 周辺遺跡分布図 (S.=1/50,000)	2
図3 試掘調査土層断面柱状図	4
図4 トレンチ配置図 (S.=1/300)	5
図5 土層断面図 (S.=1/80)	7
図6 出土遺物 (S.=1/3)	9
図7 出土遺物 (S.=1/3)	10
図8 出土遺物 (S.=1/4)	11
図9 山土遺物 (S.=1/4)	12
図10 表面採集資料実測図 (S.=1/3)	13
図11 表面採集資料実測図 (S.=1/3)	14
表1 墓輪観察表	15

図版目次

図版1 1. 梶上鎌子塚古墳全景	
2. 調査前の状況	
図版2 1. トレンチ掘削状況（東から）	
2. トレンチ掘削状況（西から）	
図版3 1. 西サブトレンチ遺物出土状況	
2. 東サブトレンチ掘削状況	
図版4 出土遺物 (S. ≈ 1/3)	
図版5 出土遺物 (S. ≈ 1/3)	
図版6 山土遺物 S. ≈ 1/6 (16~18) + S. ≈ 1/3 (19~26)	
図版7 出土材の顕微鏡写真	

第1章 位置と環境

御所市は、その平地部分が奈良盆地の南西端の一画を占め、南東部は盆地の南端を限る竜門山地となり、西側は盆地と大阪平野を画する金剛山地となる。

被上罐子塚古墳⁽¹⁾（1）は、東西に主軸を置く全長149mを測る前方後円墳である。本墳は御所市域でいえば東部に位置し、その西側は国見山から北に伸びる尾根によって奈良盆地とは画される。一方、東側の谷は高取町域に至り、またこの谷は南方向にも曾我川沿いに伸びており、通称巨勢谷を経て吉野川に至る。

今回の調査地は、この被上罐子塚古墳の北側周堤に北接する地点（周堤外側）に相当する。この周堤上は、現在は市道被上一秋津線として利用されており、アスファルト舗装されている。

御所市の歴史的環境については、これまで「巨勢山境谷10号墳発掘調査報告」・「巨勢山古墳群Ⅱ」・「中西遺跡－第2次発掘調査報告－」⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾でも述べられているので、ここでは重複を避けて、被上罐子塚古墳を中心として南葛城地域の古墳時代を概観したい。

前期の状況として、本墳の所在する被上地内において、鏡・刀剣・勾玉・石合子・車輪石の出土が伝えられている。これらが出土したという古墳は既に消滅しているが、粘土構を主体とする前方後円墳とも考えられている。5世紀前葉には、全長238mの規模を有する宮山古墳（2）が築

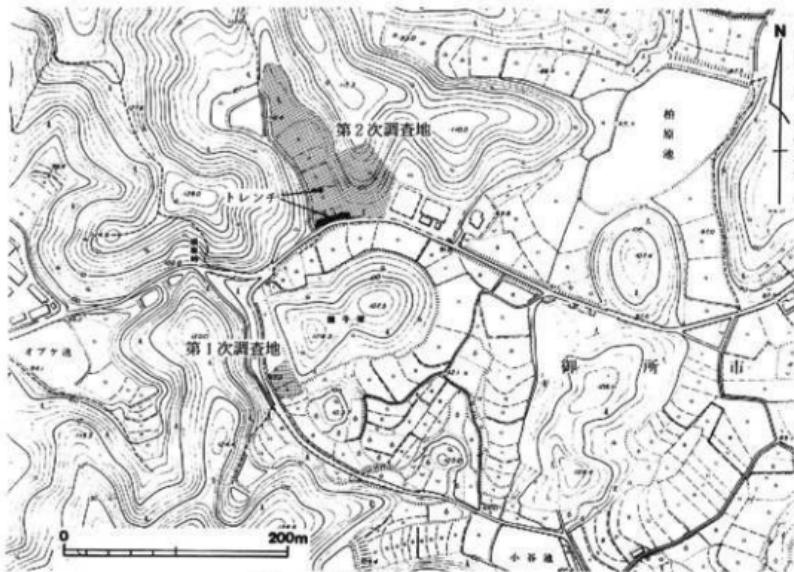
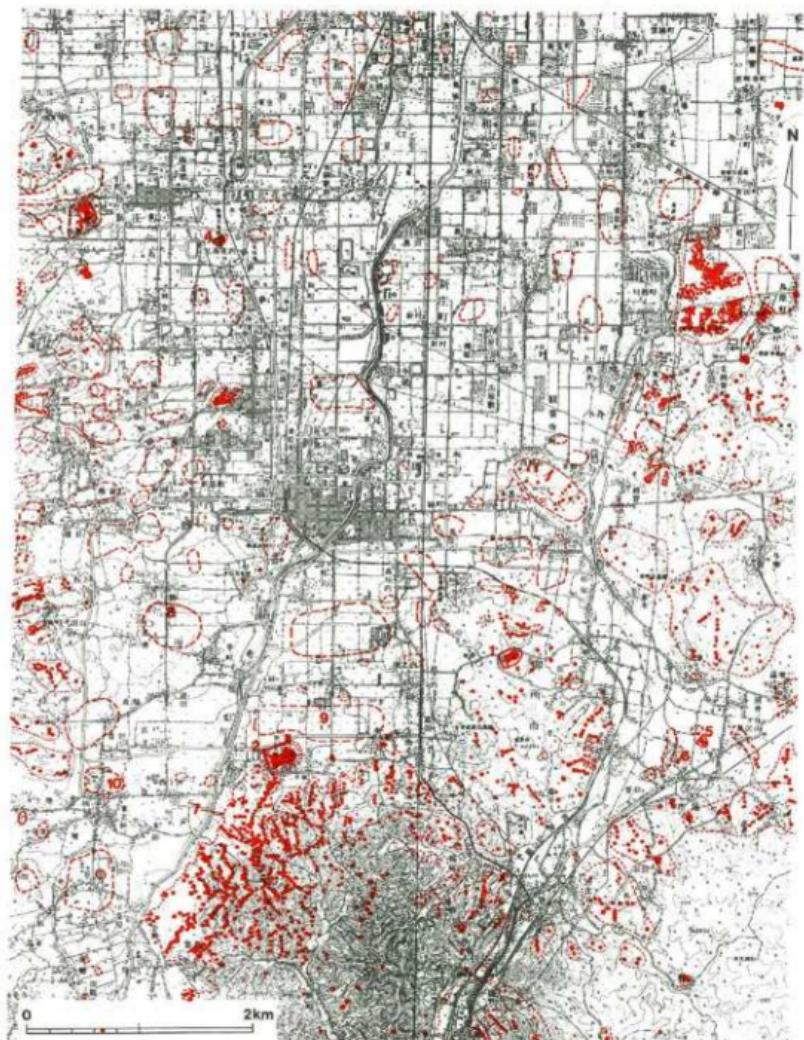


図1 調査地位置図 (S. = 1/5,000)



1. 被上錐子塚古墳 2. 宮山古墳 3. 新庄屋敷山古墳 4. 飯豊陵古墳 5. 市尾墓山古墳
6. 市尾宮塚古墳 7. 巨勢山古墳群 8. 椿原遺跡 9. 中西遺跡 10. 名柄遺跡

図2 周辺遺跡分布図 (S. = 1 / 50,000)

造され、その後奈良盆地の南西部には、首長墓に位置付けられる古墳として新庄町域の屋敷山古墳⁽¹⁾（3）・飯豊陵古墳⁽²⁾（4）・二塚古墳⁽³⁾などが築造される。一方、掖上罐子塚古墳の東および南方向に伸びる谷沿いには、市尾墓山古墳⁽⁴⁾（5）・市尾宮塚古墳⁽⁵⁾（6）などが築造される。また、宮山古墳の背後の丘陵には総数800基に達するともいわれる巨勢山古墳群⁽⁶⁾（7）が造営され、6世紀代にその築造のピークを迎える。当該期にはまた、葛城山・金剛山の東麓においても群集墳が形成され、古墳築造は活況を呈する。

古墳以外の遺跡については、前期の橋原遺跡⁽⁸⁾（8）があり、中期前葉では、近年の調査で宮山古墳およびその陪塚であるネコ塚古墳の築造に関係する遺跡かとみられる中西遺跡⁽⁹⁾（9）が明らかになりつつある。また中期後葉から後期前葉にかけての時期に、豪族の居館跡と考えられた名柄遺跡⁽¹⁰⁾（10）がある。後期の集落遺跡については、調査例が少なくなお不明な点が多い。今後の調査に期待される。

さて、掖上罐子塚古墳についてのこれまでの調査としては、昭和52年に前方部西側の濠内で市道建設に伴うトレンチ調査が行われている（第1次発掘調査）。当該調査で、周濠が鎌倉時代まで埋没していなかったことが明らかにされ、更に前方部南側の円墳が掖上罐子塚古墳に先行する可能性が指摘された。また昭和57年から昭和59年には、「南葛城地域の古墳文化研究会」によって墳丘測量調査が行われた。なお第1次発掘調査と測量調査の間に、周堤北側の市道拡幅工事が計画され、奈良県文化財保存課と市関係者による立会・協議がもたれたことが、『樞原考古学研究所年報』に記載されている。

註（1）網干善教「罐子塚古墳」（『御所市史』、1965年）

楠木哲大「御所市掖上罐子塚 前方部周濠発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報1977年度』、1978年）

南葛城地域の古墳文化研究会『奈良縣御所市掖上罐子塚古墳測量調査報告』（1986年）

（2）藤田和尊「奈良県御所市室 巨勢山境谷10号墳発掘調査報告」（『御所市文化財調査報告書』第4集、1986年）

（3）藤田和尊「奈良県御所市 室中西遺跡－第2次発掘調査報告－」（『御所市文化財調査報告書』第6集、1987年）

（4）木許 守「奈良県御所市室 中西遺跡－第2次発掘調査報告－」（『御所市文化財調査報告書』第9集、1990年）

（5）島本一「琴柱形石製品の新例」（『考古學雑誌』第28巻第6号、1938年）

（6）網干善教「宇大墓」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊、1959年）

（7）菅谷文則「新庄屋敷山古墳」（1975年）

（8）河上邦彦「新庄町飯豊陵古墳外庭の調査」（『奈良県古墳調査集報II』『奈良県文化財調査報告書』第30集、1978年）

土生田純之「埴口丘陵外堤の調査」（『吉陵部紀要』第32号、1980年）

（9）上田宏範・北野耕平・伊達宗泰・森浩・「大和二塚古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第21冊、1962年）

（10）河上邦彦「市尾墓山古墳」（『高取町文化財調査報告第5編』、1984年）

（11）網干善教「小殿古墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第3集、1960年）

網干善教「御所市小殿第二号墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第4集、1961年）

- 久野邦雄「大和巨勢山古墳群（境谷支群）－昭和48年度発掘調査概報－」（1974年）
 千賀久・田中一広「御所市巨勢山古墳群（ミノヤマ支群）発掘調査概要 I」（『奈良県遺跡調査概報1982年度』、1983年）
 田中一広「御所市巨勢山古墳群（タケノクチ支群）発掘調査概報－県道古瀬小瀬線道路特殊改良工事に伴う調査－」（『奈良県遺跡調査概報1983年度』、1984年）
 田中一広「奈良県御所市巨勢山古墳群調査概要 II－分布調査及び條地区における発掘調査－」（『御所市埋蔵文化財調査概報58-1』、1984年）
 藤田和尊「奈良県御所市室 墓所市境谷10号墳発掘調査報告」（前出注2文献）
 藤田和尊「奈良県御所市室 巨勢山古墳群II-御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査I-」（前出註3文献）
 (12) 1987年 御所市教育委員会調査
 (13) 木許 守「奈良県御所市室 中西遺跡-第2次発掘調査報告-」（前山註4文献）
 木許 守「奈良県御所市室 中西遺跡-第3次発掘調査報告-」（『御所市文化財調査報告書』第10集、1991年）
 (14) 1987~88・1989年 御所市教育委員会調査
 御所市教育委員会「名柄遺跡発掘調査現地説明会資料」（1989年）
 藤田和尊「御所市・名柄遺跡の調査（コロタイプ図版解説）」『考古学研究』第35巻4号 1989年
 (15) 楠本哲夫「御所市坂上籠子塚 前方部周濠発掘調査概報」（前出注1文献）
 (16) 南葛城地域の古墳文化研究会「奈良県御所市坂上籠子塚古墳測量調査報告」（前出注1文献）
 (17) 横原考古学研究所『横原考古学研究所年報 昭和57年度（1982）』（1983年）

第2章 調査の契機と経過

平成3年8月2日、御所市大字室515番地 御所東部農業協同組合組合長理事 吉村宗一郎氏より、御所市大字柏原883外13筆について、文化財保護法第五七条の二に基づいて、「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当該地の南辺は、坂上籠子塚古墳周堤の北側斜面に相当するとみられ、また、擁壁工事により掘削の及ぶ範囲であることから、当市教育委員会は、まず試掘調査を実施して、遺構・遺物の遺存状況を確認した後、発掘調査を実施すべきとの意見書を付して、これを奈良県教育委員会に進呈する一方、同法第九七条の二に基づいて「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出した。

試掘調査は、平成3年8月11日に行った。トレントは、最も古墳周堤に近接する敷地の南辺に2箇所、および本体建物が建設される付近としてより北側に1箇所の計3箇所を設定した。

その結果、いずれのトレントでも、有機質を多く含む黒灰色粘質土層（図3、第4層）が見られ、同層中に円筒埴輪片を検出した。また、それより下層にも土師器等遺物包含層（同、第5層）を認めた。しかし、どのトレントにおいても遺構は認められなかっ

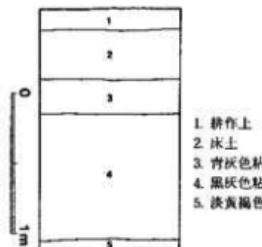


図3 試掘調査土層断面柱状図

た。また、北側のトレンチにおいては、現地表下165cmまでに涌水点に達し、かつ既述の黒灰色粘質土層下は軟弱な砂層であり、この層をベースとする居住地が存在するとは考え難く、遺物包含層は、当該地が谷地形であることから、土砂の流入の結果、形成されたものと判断された。

この試掘調査結果をもって、当市教育委員会は開発原因者との協議を行い、掘削深度の深くなる擁壁部分（敷地南辺）については発掘調査を実施し、本体建物部分については、工事による掘削が浅いことが考慮され、工事時の立会調査とする結論を得た。擁壁部分の調査範囲については、幅3m、長さ60mの180m²を対象とすることが確認された。

調査は、同年10月21日 нача начало. 調査対象区の西側から深さ1.0～1.5mで掘削を開始し、西端から約30mの地点に至ったが、この時点で、調査地の地盤が著しく軟弱であり壁面の崩落が激しく、また後述するように、工事で掘削される深さ1mまでには造構面が存在せず、南接する古墳周堤をも損壊しないことが判明した。以上の理由により、いたずらに調査区を拡大することは、むしろ危険であると判断され、擁壁部分の、調査が及ばなかった箇所については、工事時の立会調査を行うことを開發原因者との間で確認したうえで、調査面積を都合約90m²に縮小することとした。また同様の理由で、調査により掘削する深さも上記の程度に止めざるをえなかったため、下層の状況を知るためにトレンチ内に2箇所のサブトレンチを設定し、これを掘削した。

現地調査は同年11月12日に終了した。実働日数は13日である。

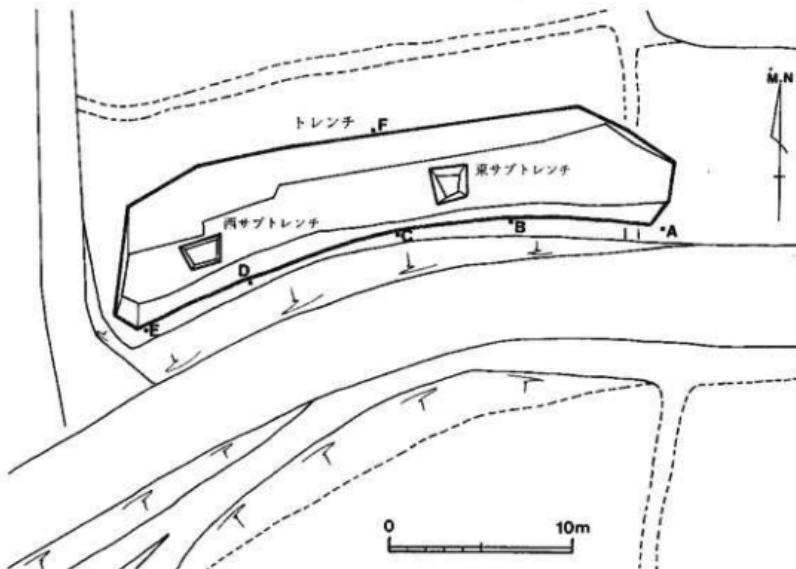


図4 トレンチ配置図 (S.-1/300)

第3章 調査の成果

(1) 種序

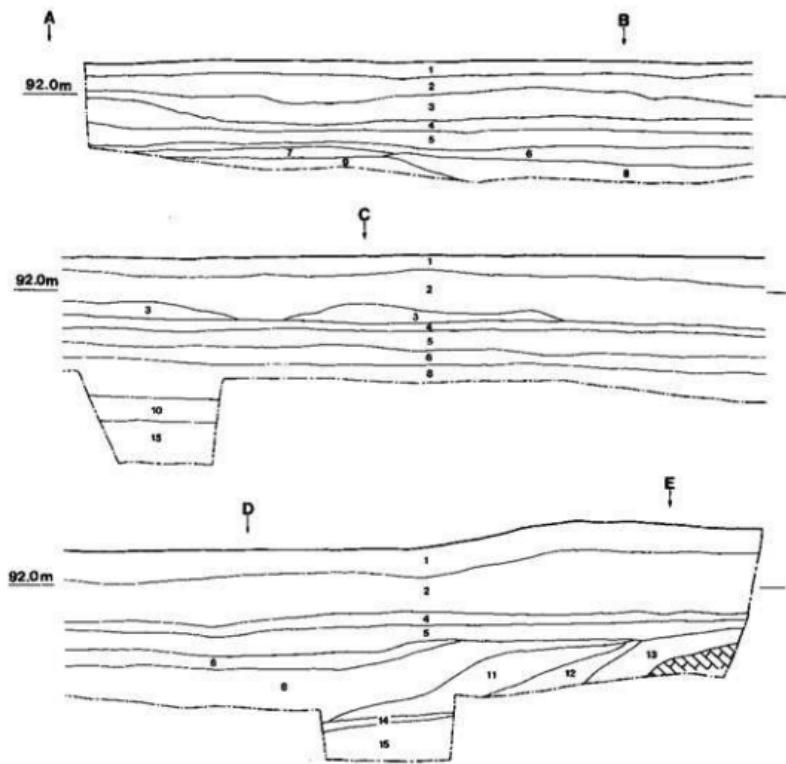
調査区で検出した層位は、図5に示したとおりである。地元の人からの伝聞によると、当該地は、元の耕作地に盛土をして現在の耕作地を造成したという。上質およびその均質な堆積状況から、この旧耕作土・床上が第4層・第5層に相当し、第3層・第2層（現床土）が盛土に相当するものと思われる。これらの下層には、第6層以下が堆積するが、トレンチの西端では地山（明褐色粘土）が東に向かって傾斜する状況で検出され、第11～13層など、西側の尾根から上砂が流入して堆積した状況が看取できる。これらの第6～9層及び第11～13層は遺物の出土が全く無いか、ごく僅かの出土をみたに過ぎない。これらから下層の状況については、既述の2箇所のサブトレンチによって知り得た。西サブトレンチで検出した第14層は黒褐色粘土層であり、埴輪片・木製品が出土した。第15層は暗灰色粗砂で、東西のサブトレンチで検出でき、土師器片が数片出土した。

なお、以上の土層のいずれにおいても遺構は検出されなかった。また先に行った試掘調査で検出した遺物包含層との対応関係は、図3の第4層が図5の第8層もしくは第14層に、図3の第5層が図5の第15層に、それぞれ相当するものと思われる。

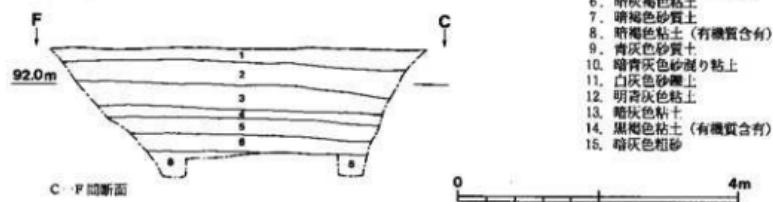
さて、第15層から出土した土師器片は、細片であるため図化し得ず、その時期の特定も困難であるものの、古墳時代前期のものであるとみられ、したがって、第15層は本墳築造当初には先行する遺物包含層として堆積していたものと考えられる。また第14層からは埴輪片が出土することから、当該土層は古墳築造後に堆積したものと考えられる。そして、調査区の南端断面を示した図5に明らかなように、第1～11層まではこの第14層の上位に堆積しているのであり、第12・13層についてもそのように推定できる。つまり、これらはことごとく古墳築造後の堆積ということになる。このように、調査区の最も南側、すなわち調査区の最も古墳周堤近くの断面においてすら、周堤の外側斜面を検出することができなかつたのであり、古墳周堤は、現在の道路幅より狭いことになる。今回の調査地では、道路および排水溝のためにこれ以上周堤方向に向けてのトレンチを掘削できなかつたが、以上の層序および各層の形成時期についての認識からすれば、周堤の北側（外側）基底は、第15層の上面に置かれているものと推定できる。

(2) 遺物

遺物は、コンテナパットにして5箱程度を得た。川土層位は、試掘調査では第2層・第4層・5層（図3）であるが、第5層出土遺物は細片であるため図化し得なかつた。本調査では第2層・第4層・第5層・第14層・第15層（図5）で検出した。試掘調査時の第5層と同一層とみられる第15層出土遺物は、同様に図化し得なかつた。また、調査中に埴丘上で表面採集した埴輪片があり、図化できるものを図10・11に示した。以下にこれらの遺物について記述するが、埴輪についての詳細は、表1 墳輪観察表に譲る。



A-E 間（トレンチ南壁）断面



1. 耕作土
2. 赤褐色粘質土
3. 青灰色砂礫混り粘土
4. 暗青灰色砂質土
5. 青灰色粘土混り砂質土
6. 暗灰褐色粘土
7. 暗褐色砂質土
8. 暗褐色粘土（有機質含有）
9. 青灰色砂質土
10. 離背灰色砂混り粘土
11. 白灰色砂礫土
12. 明青灰色粘土
13. 暗灰褐色粘土
14. 黑褐色粘土（有機質含有）
15. 暗灰色粗砂

図5 土層断面図 (S. = 1 / 80)

試掘調査で出土した遺物は1・2である。それぞれ、第2層・第4層(図3)で検出した。1は土器師釜である。口縁部は内側させ、端部を外方へ折り返し強いヨコナデで仕上げる。鉢下半部に煤が付着している。14世紀後半期のものであろう。2は円筒埴輪片である。

3~18は本調査出土遺物である。

3~7は第4層(図5 以下同じ)で検出した。3~6は瓦器碗である。底部の形態を知るほどには残存しておらず、口径が復元できたのは3のみで、15.6cmを測る。いずれも口縁端部を強いヨコナデで仕上げている。外面にはヘラミガキを施すが、内外面とも比較的密に行うのは4のみで、3は内面は密に行うが外面は指頭圧痕を残すほどに粗い。5・6は内外面共に粗い。ヘラミガキを省略する傾向にある段階のものである。7の円筒埴輪片は、外面にヘラ記号を有する。外面調整のヨコハケはみられない。

9~12は第5層出土遺物である。9は円筒埴輪胴部であり、10~12は形象埴輪片である。10は盾形で、盾部周縁と円筒部との接合部に相当し、盾面には線刻が見られる。11・12は蓮形の立飾部の破片であろう。表裏ともに線刻を行っている。

13~18は、第14層で検出した。前節で述べたとおり、当該土層は西サブレンチで検出したもので、調査区全域で見いだしたものではない。しかし既述のように、古墳周囲の基底をおくと考えられる第15層の直上層であり、かつ、これより上層から出土した遺物に対して破片が比較的大きく、同一時期の遺物のみが出土する単純層である。

13は朝顔形埴輪の口縁部である。端部を外方に折り返して肥厚させる。復元口径35.6cmを測る。14・15は円筒埴輪胴部である。14の外面調整はタテハケの後ナデにより仕上げ、ヨコハケ調整を行わない。15は円形のスカシ孔を残存下端部に残している。外面調整はナメハケの後ヨコハケを用いるが、極めて粗く省略の傾向にある。16~18は木製品である。16は厚み4.5~5.8cmを測る板状を呈するが、残存している形状でいえば、短辺の端部は斜めに削られている。長辺の一方は凸字状に加工されているが、突出している箇所の端部を残しておらず長さが不明であり、元どのような形態をしていたものかは判らない。ただ第4章に述べられているとおり、その材質についてコウヤマキを使用しているとの鑑定を得ており、建築部材等とは考え難く、古墳に伴う木製樹物と思われる。17・18は、全長について不明であるが端部を尖らせている形状から杭と判断される。しかし原位置で検出したものではないために、どのような目的で使用されたものであるかは不明である。

19~26は調査中古墳の埴輪上で表面採集したものである。遺存状態は悪く外面調整の判る資料も少ないが、22ではタテハケ後ヨコハケ調整が認められ、それが省略される傾向にあることが看取できる。採集資料の多くは円筒埴輪であるが、19は朝顔形埴輪の口頭部であり、25は、小片であるため断定し難いが、上方が内湾する傾向にあることから朝顔形埴輪局部であると思われる。26は形象埴輪であるが、全体の形態は不明である。

さて、以上のように、旧耕作土(第4層)など整地・盛土層から上位では埴輪と中世の遺物との

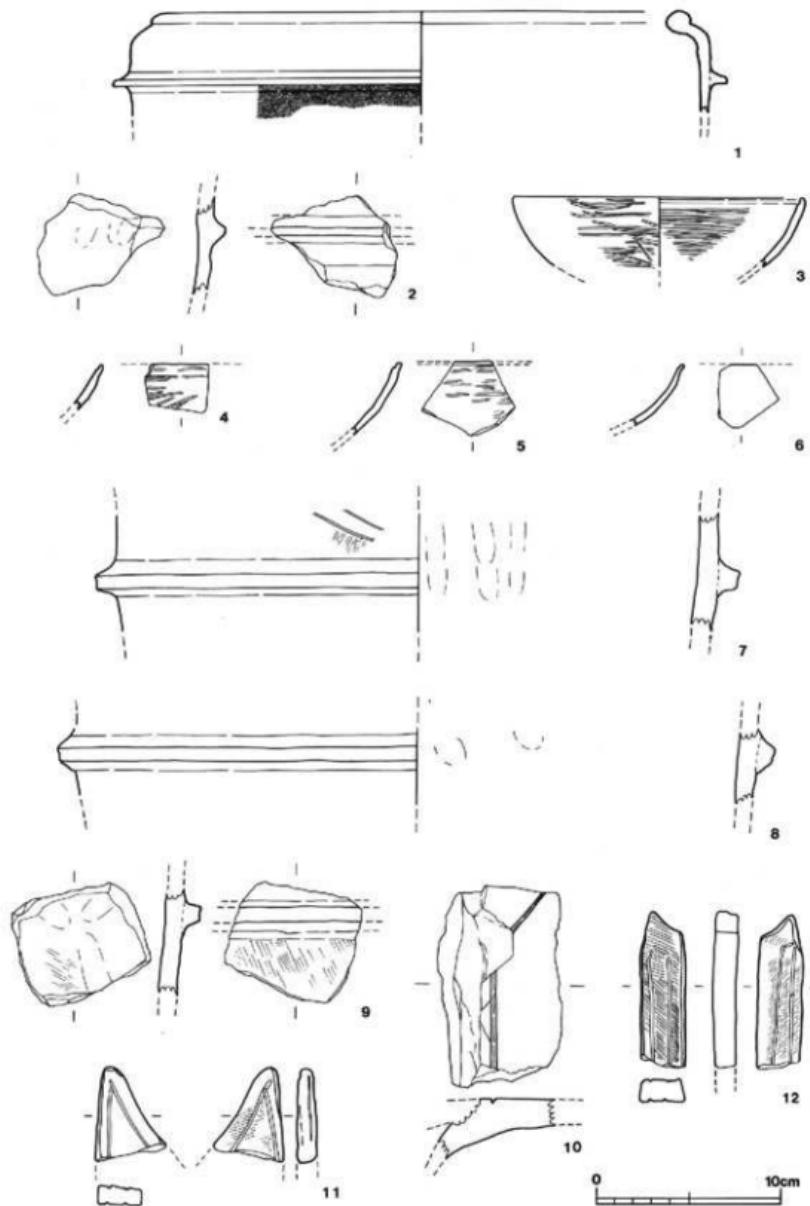


图6 出土遗物 (S. = 1 / 3)

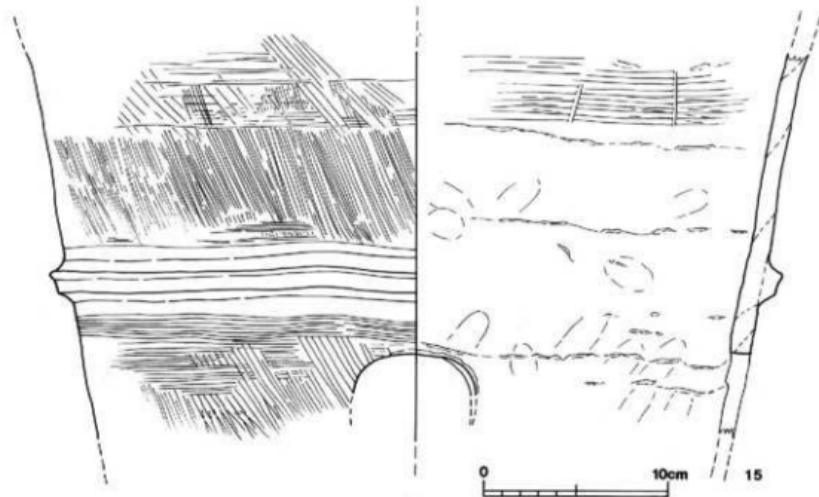
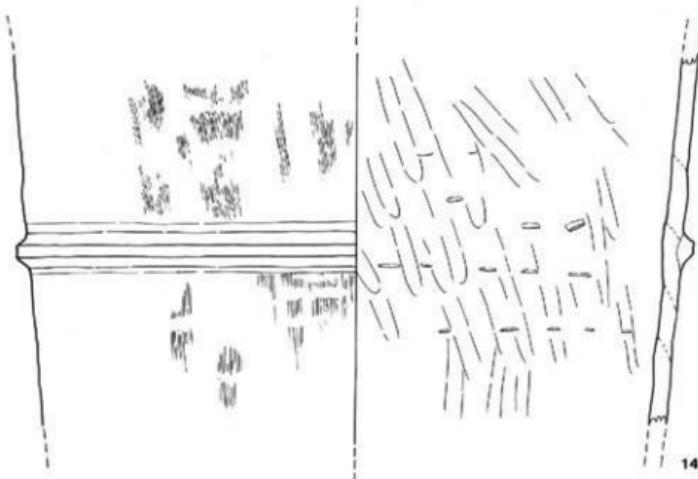
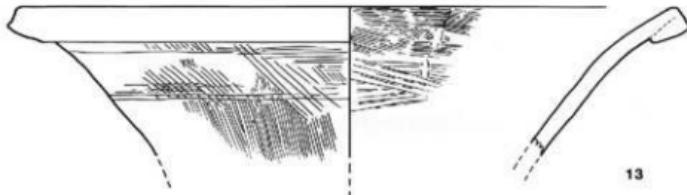
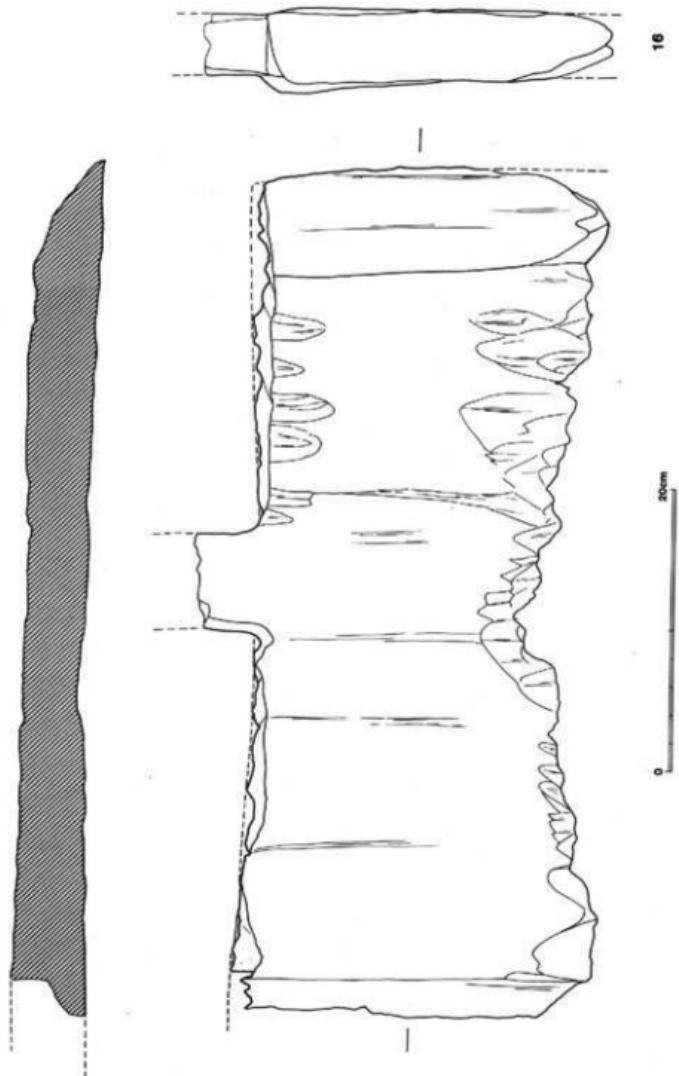


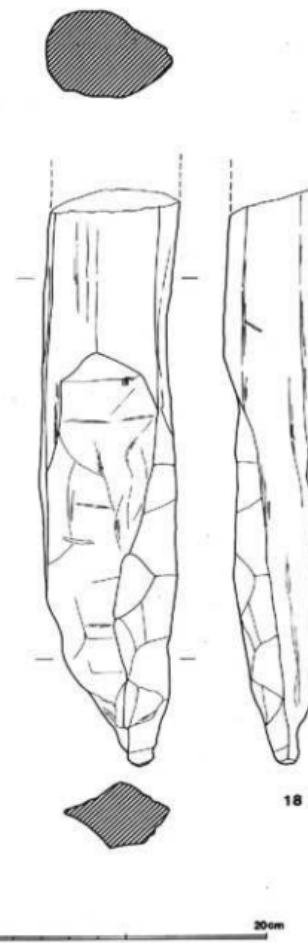
図7 出土遺物 (S. = 1 / 3)

圖 8 山土遺物 ($S_r = 1/4$)





17



18

図9 出土遺物 ($S_r = 1/4$)

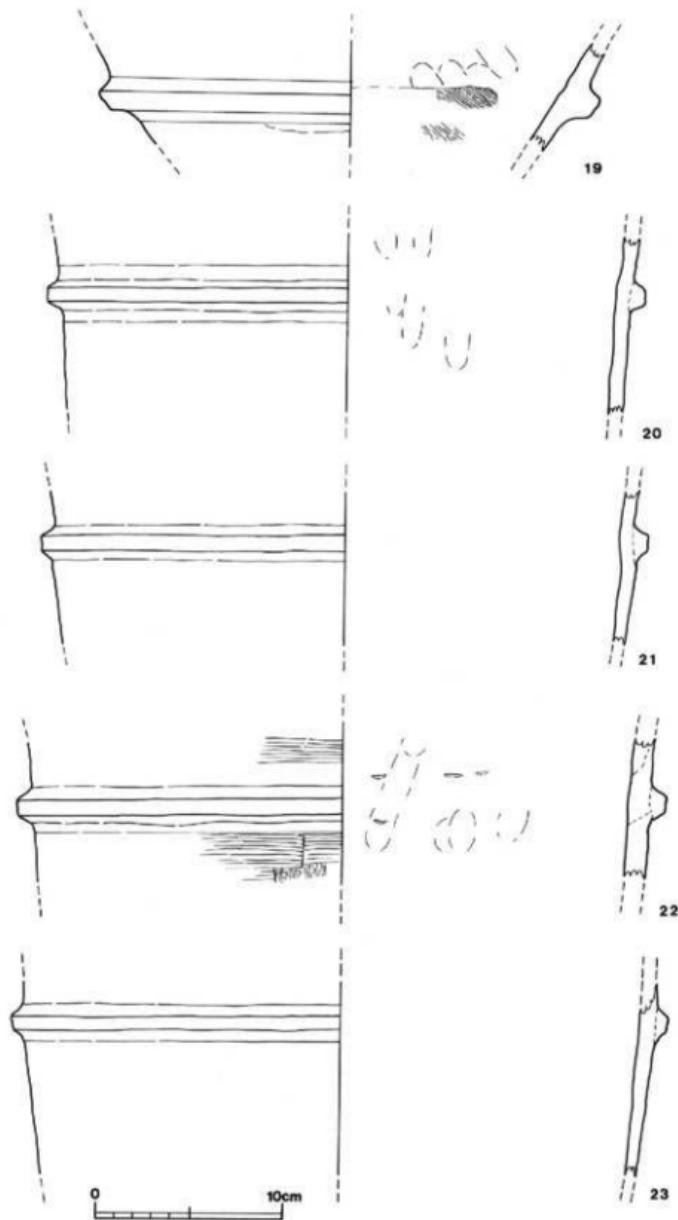


図10 表面採集資料実測図 (S. = 1 / 3)

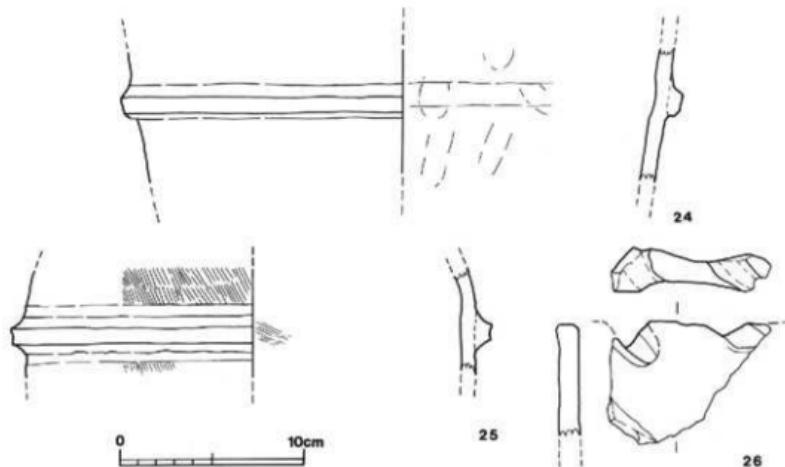


図11 表面採集資料実測図 (S. = 1/3)

混在が認められた。しかし第14層ではそのような混在はみられず、のことから同層が古墳築造後さほど時間を経過せずに堆積したものと理解される。出土した13~16などは周堤上に樹立されていたものが転落し、その後大きな移動はなかったものと思われる。

また、出土した円筒埴輪についてみた場合、いずれも黒班を有するものは1点も認められず、外面2次調整については、ヨコハケを省略する傾向にあり、その技法を用いない固体(14)も認められた。タガ断面の形態は、突出度が低い台形を呈するものを主とする。

円筒埴輪の編年については、川西宏幸⁽¹⁾、赤塚次郎氏⁽²⁾らの研究があり、近年は地域性や、埴輪の法量による違いなどが問題にされ、より詳細な研究が進められている。⁽³⁾今回の調査で出土した円筒埴輪の諸特徴を、これらの編年に照らした場合、窯窓焼成出現以降で外面2次調整が完全には省略されない段階、すなわち川西編年では第IV期に位置付けられる。第2次調整の省略される傾向から、その中でも新しく位置付けられる可能性がある。

註 (1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年)

(2) 赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」(『古代学研究』第90号、1979年)

(3) 関川尚巧「大和における大型古墳の変遷」(『考古学論叢』第11冊、1985年)

天野末喜・松村隆文「円筒埴輪—近畿」(『古墳時代の研究』9 古墳Ⅲ 墓輪、1992年)などがある。

表1 塗輪観察表

遺物 No.	出土地点	種類	部位	色	調	焼成	胎土	内面調整	外面調整	条線/cm	タガ		黒斑	備考
											高さmm	幅mm		
2 (試掘) 4層	円筒	胴部	黄灰色	やや 軟	やや 粗	ナデ	タテハケ?	3	20	6	無			
7 第4層	円筒	胴部	淡灰色	良	やや 粗	ナデ	ナナメハケ	7	20	10	無	ヘラ記号?		
8 第5層	円筒	胴部	白灰色	良	やや 粗	ヨコハケ 後ナデ	不明	不明	23	9	無			
9 第5層	円筒	胴部	白灰色	良	密	ハケ後 ナデ	ナナメハケ	6	20	10	無			
10 第5層	盾 盾内筒 接合部	淡黃灰色	良	密	ナデ	ナデ	—	—	—	—	無	ヘラ状工具 による線刻		
11 第5層	蓋	立飾	灰褐色	やや 軟	密	—	ハケ	8	—	—	無	ヘラ状工具 による線刻		
12 第5層	蓋	立飾	白橙色	やや 軟	やや 粗	—	ハケ	6	—	—	無	ヘラ状工具 による線刻		
13 第14層	朝顔	口縁	白灰色	良	密	ヨコハケ	タテハケ後 ヨコハケ	3・6	—	—	無			
14 第14層	円筒	胴部	淡灰黄色	良	密	ナデ	タテハケ後 ナデ	11	20	6	無			
15 第14層	円筒	胴部	白灰色	良	密	部分的に ヨコハケ	ナナメハケ後 ヨコハケ	7	26	9	無	径6.1cm円 形スカシ		
19 埴丘上	朝顔 部	淡橙色	良	密	ナナメ ハケ	ハケ後ナデ	10	22	11	無				
20 埴丘上	円筒	胴部	黄橙色	良	やや 粗	ナデ	不明	不明	19	7	無			
21 埴丘上	円筒	胴部	黄褐色	やや 軟	やや 粗	不明	不明	20	7	無				
22 埴丘上	円筒	胴部	淡橙色	良	やや 粗	ナデ	タテハケ後 ヨコハケ	7	23	8	無			
23 埴丘上	円筒	胴部	黄褐色	良	やや 粗	不明	不明	不明	21	6	無			
24 埴丘上	円筒	胴部	赤褐色	良	密	ナデ	不明	不明	20	7	無			
25 埴丘上	朝顔 か? か?	門部 淡黄褐色	良	密	ナナメハ ケ後ハケ	タテハケ	6	20	8	無				
26 埴丘上	形象	不明	赤褐色	良	やや 粗	ナデ	ナデ	--	—	—	無	端部に指に による、断面 U字形の跡 みあり		

第4章 出土材の樹種

天理大学附属天理参考館

金原正明

試料は3点あり、両刃カミソリを用いて、木材の横断面（木口面）、放射断面（柾目面）、接線断面（板目面）の基本的な3断面の切片を作製し、光学顕微鏡によって40～600倍で観察した。樹種同定は、これらの試料標本をその解剖学的形質および現生樹木の木材標本との対比によって行った。試料は切片の採取順に1～3の番号を付けた。

同定の結果と同定根拠となる解剖学的形質を以下に記載する。

試料1・3（実測図番号17・18）：スタジイ *Castanopsis cuspidata Schottky*

var. *sieboldii* Nakai ブナ科

環孔状の放射孔材で、孔圈部の道管は単独で大きく、やや疎な配列である。放射方向に大きさを減じながら連続し、孔圈外に移ると急激に減る。孔圈外の道管は小型で、火炎状に配列する。道管は單穿孔である。放射組織は単列で同性のもののみである。シイ属には集合放射組織をもつツブラジイ (*C. cuspidata Schottky*) とその中間的なものがあるが、ここではスタジイと同定した。福島県以南の暖温帯に分布し、照葉樹林の主要構成要素の1つである。常緑の広葉樹で樹高約25m、直径約70cmにもなる。建築・器具・船などに使われる。

試料2（実測図番号16）：コウヤマキ *Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.*

コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅が狭い。放射組織は放射柔細胞から構成され、分野壁孔が窓状である。放射組織は単列である。福島県以南の本州・四国・九州の暖温帯上部に分布する。常緑の針葉樹で、樹高約35m、直径約1mになる。耐朽耐水性に優れ、強靭で微香がある。桶類・建築・船・棺・井戸枠に使われる。

試料1・3はスタジイであり特殊な選材とは考えられないが、試料2はコウヤマキであり古墳と関連のある木製品ではなかろうか。

第5章 まとめ

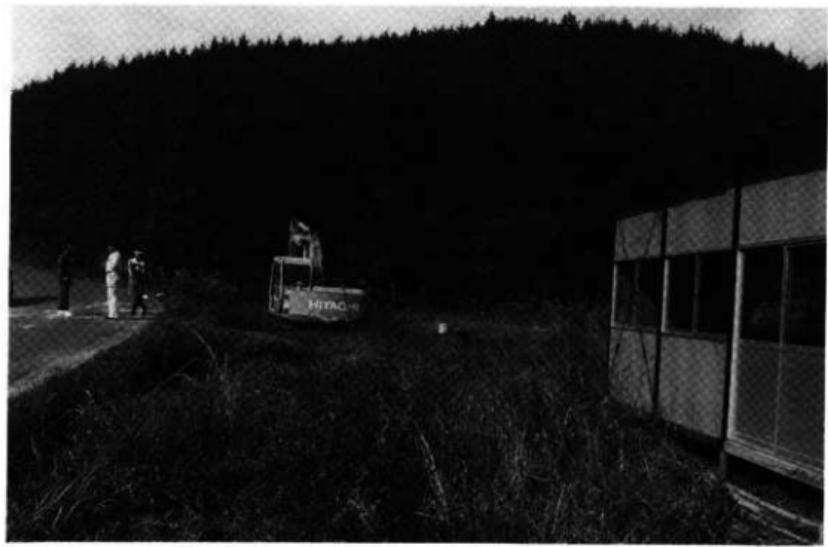
以上のように、今回の調査区は、古墳周堤のなお外側に位置していることが明らかになり、従って、周堤の基底をも検出することができなかった。しかしながら、現表七下約2mの深さを上面とする第14層中に埴輪が認められ、第15層ではそれが認められなかったことから、周堤の基底は第14層下、第15層の上面に置かれていたものと推定できた。

また、遺物については、豊富な資料を得た訳ではないが、それでも貴重な知見を得ることができた。いうまでもなく周堤外側の、包含層出土資料から本墳の築造時期を決定することはできないが、それを考える一資料を得たといえよう。從来本墳の築造期については、第1次調査で検出された鱗付埴輪の存在などから、5世紀後半でも古い段階を考え、南葛城地域の古墳時代首長墓の系譜として宮山古墳から本墳を経て新庄町域の屋敷山古墳へと引き継がれて行くものと考えられてきた。しかし今回の調査によって検出された埴輪の時期を前述したように考えると、宮山古墳との間には少なくとも1世代の空白を考えておく必要があり、また屋敷山古墳との前後関係も決し難い。さらに本墳から、高取町域の市尾墓山古墳への系譜も考慮に入れておく必要があろう。

しかしながら、このような系譜を論ずるには、被上罐子塚古墳に関する発掘調査はいずれも小規模なものであり、資料不足の感は否めない。ただ、本墳が当地域の古墳時代中期の首長墓の系列に入ることは、その墳丘規模およびこれまでの採集資料からみて間違いないところである。今後とも、注意深い資料収集の必要があると言えよう。



1. 挿上罐子塚古墳全景



2. 調査前の状況



1. トレンチ掘削状況（東から）



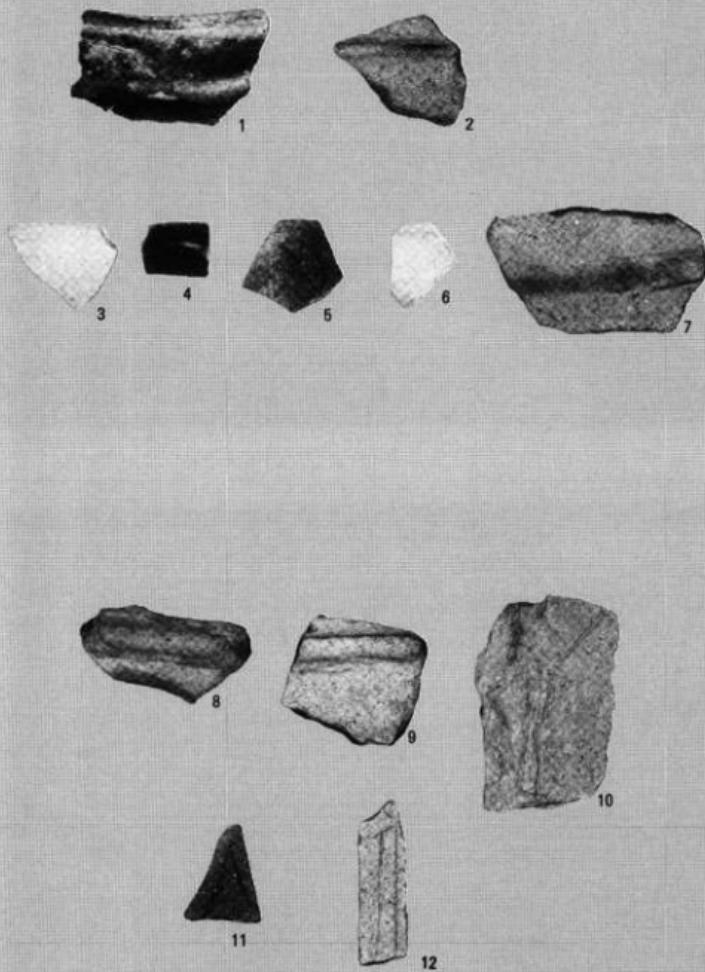
2. トレンチ掘削状況（西から）



1. 西サブトレンチ遺物出土状況



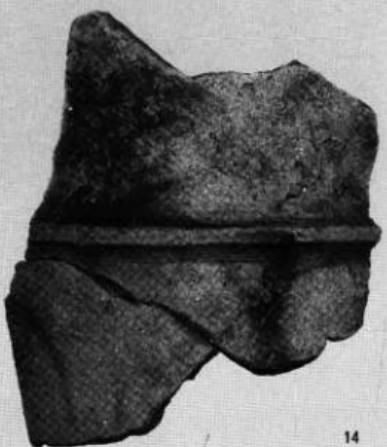
2. 東サブトレンチ掘削状況



出土遺物 (S.=1/4)



13

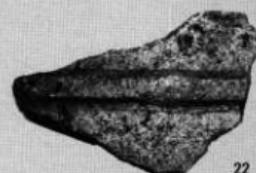
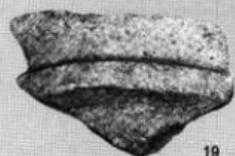
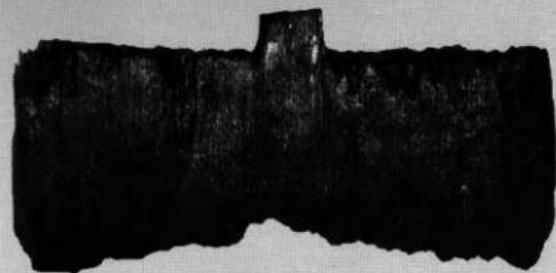


14

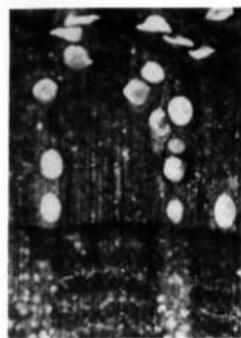


15

出土遺物 (S.= $\frac{1}{3}$)



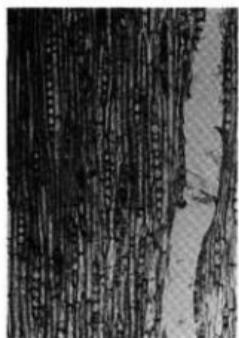
出土遺物 S.= $\frac{1}{6}$ (16~18)、S.= $\frac{1}{3}$ (19~26)



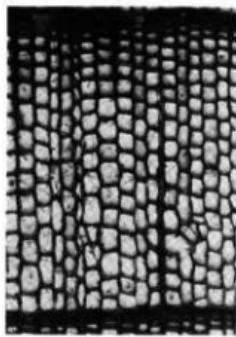
試料1 スタジイ (横断面)



同 (放射断面)



同 (接線断面)



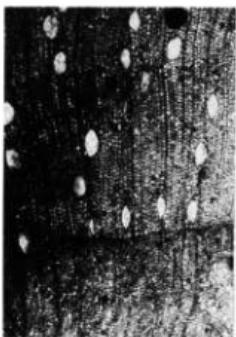
試料2 コウヤマキ (横断面)



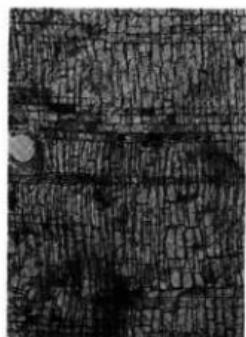
同 (放射断面)



同 (接線断面)



試料3 スタジイ (横断面)



同 (放射断面)



同 (接線断面)

出土材の顕微鏡写真

奈良女子大学附属図書館

奈良県御所市柏原
城上鍾子塚古墳第2次発掘調査報告
周堤築接地の製作
御所市文化財調査報告書 第14集

平成4年3月31日

編集・発行 御所市教育委員会
御所市三室 117番地
印刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町3-464番地